

Ⅲ 上ノ国町の文化財

1. 過去の調査について

上ノ国町や北海道などでは、今回の歴史文化基本構想策定事業以前に町内において様々な調査を実施し、報告書などでその成果を公表している。当町では、これらの調査研究に基づき、文化財の保存活用や指定物件の選定などを行っているが、ここでは過年度に実施された調査についておもなものを掲載する。

No.	名 称	年度	概 要	調査主体
1	上ノ国村郷土誌	T6	上ノ国村の中近世の歴史を掲載。	上ノ国村
2	北海道史 第一	T7	北海道の通史を掲載し、町内では勝山館・花沢館などが掲載。	北海道廳
3	夷王山墳墓群発掘調査	S27	明治大学による夷王山墳墓群の発掘調査。	明治大学
4	上ノ国村史	S31	上ノ国村の中世～近代の歴史、伝説や産業などをまとめたもの。	松崎岩穂
5	続上ノ国村史	S37	上ノ国村の中世～近代の歴史、伝説や産業などをまとめたもの。	松崎岩穂
6	北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書	S47	北海道内の記念物の調査報告。	北海道庁
7	町内文化財所蔵調査	S53	個人所有の文化財の所蔵調査。	上ノ国町教育委員会
8	史跡勝山館跡の発掘調査	S54 ～ H22	史跡勝山館跡の環境整備事業に伴う発掘調査。	上ノ国町教育委員会
9	歴史的建造物の現状と保存に関する研究報告書	S63	歴史を生かした街づくりを進めることを目的とした調査。町内では、勝山館跡の周辺の文化財を調査。	(社団法人) 北海道総合文化開発機構
10	北海道の近世社寺建築調査	H1	北海道における近世社寺建築緊急調査事業の調査。町内では、上國寺、清浄寺、石崎八幡神社、上ノ国八幡宮、中須田稻荷神社、砂館神社を調査。	北海道教育委員会
11	湯ノ岱、宮越、早瀬、桂岡、小森の民俗調査	H7	町内の「山方面」の民俗分野の聞き取りを中心とした調査。	北海道みんぞく文化研究会
12	町内遺跡の発掘調査	H7 ～ H13・16・17	上ノ国市街地遺跡やその他の遺跡の緊急調査及び遺構確認調査。	上ノ国町教育委員会
13	町内所在古文書調査	H15	町内に所在する古文書を調査し、目録を作成。	上ノ国町教育委員会
14	文化財利活用調査	H29	地方創生事業で実施した町内の文化財の利活用調査。	弘前大学

2. 指定文化財の概要

上ノ国町には国指定文化財が4件（史跡1、重要文化財3）、北海道指定文化財が3件（有形3）、町指定文化財が32件（有形29、有形民俗1、無形民俗2）、国登録有形文化財が1件ある。

大半が有形文化財であり、北海道指定と町指定には記念物指定がないため、今回の調査で挙げられたマイ文化財の中から、指定に相応しい物件を順次追加していきたい。

国指定文化財

N0.	種 別	名 称	指定年月日	概 要
1	史跡	上之国館跡 花沢館跡 洲崎館跡 勝山館跡	S52. 4. 12	昭和52年4月12日に勝山館跡と花沢館跡が指定。 平成18年3月31日に花沢館跡と勝山館跡を統合し、洲崎館跡を追加指定の上、名称変更。
2	重要文化財	旧笹浪家住宅 主屋・土蔵	H4. 1. 21	初代は、享保年間(1716～1736)に能登国笹波村から松前へ渡ったとされ、道内の民家建築では最古の部類に属し、ニシン番屋の原型とされる。屋号は能登屋。
3	重要文化財	上國寺本堂	H5. 4. 20	永禄年間(1558～1570)に開基したとされる北海道有数の古刹。当初は真言宗だったが、江戸時代中期に浄土宗へ改宗。
4	重要文化財	北海道上之国 勝山館跡出土品	H20. 7. 10	磁器・陶器・土器・土製品313点、ガラス製品17点、木製品129点、漆器10点、金属製品338点、石製品46点、骨角製品65点、繊維製品3点の計921点と、附炭化米がある。



花沢館跡遠景



繊維製品



経文石



骨角器



鉄鍋

北海道上之国勝山館跡出土品のうちの一部

北海道指定文化財

NO.	種 別	名 称	指定年月日	概 要
1	有形文化財	円空作 十一面観音立像	S52. 3. 11	寛永6（1666）年に北海道へ渡った円空作の仏像。町内には6体が確認されているが、本作は道内唯一の十一面観音立像で、高さが約150cmある。残り5体の観音座像は町指定になっている。
2	有形文化財	砂館神社本殿	S60. 3. 30	上ノ国3社の一つとされ、武田信廣が崇拝する毘沙門天を祀った神社。寛政3（1462）年の創立で、現在の本殿は安永8（1779）年の建立。
3	有形文化財	上ノ国八幡宮本殿	H29. 3. 31	文明5（1473）年武田信広が勝山館の館神として創建。現在の本殿は元禄12（1699）の年建立で、現存する神社建築としては本道最古に属する。



砂館神社本殿



円空作十一面観音立像

町指定文化財

NO.	種 別	名 称	指定年月日	概 要
1	有形文化財	清浄寺本堂	H5. 8. 10	松前専念寺が道南各地に建てた掛所道場のひとつで、10世の了幻が明和3（1766）年5月に開いたという。掛所道場の実態を示す数少ない遺構として貴重。
2	有形文化財	紺糸威胴丸	S47. 9. 11	江戸時代中期（宝暦年間）のもので、松前藩主着用の品であろうとされている。
3	有形文化財	円空作 仏像 観音座像	S60. 7. 23	円空作の仏像。町内には6体が確認されてうちの1体で、北村地藏庵に安置されている。（像高 41.9 cm）
4	有形文化財	円空作 仏像 観音座像	S60. 7. 23	円空作の仏像。町内には6体が確認されてうちの1体で、光明寺に安置されている。（像高 33.8 cm）
5	有形文化財	円空作 仏像 観音座像	S60. 7. 23	円空作の仏像。町内には6体が確認されてうちの1体で、石崎八幡神社に安置されている。（像高 31.5 cm）
6	有形文化財	円空作 仏像 観音座像	S60. 7. 23	円空作の仏像。町内には6体が確認されてうちの1体で、教育委員会が所蔵。（像高 26.5 cm）

7	有形民俗文化財	円空作仏像観音座像	S60. 7. 23	円空作の仏像。像の一部を護符として削ったり、子供達が遊び相手にした等との言い伝えも残されており、民俗文化財として指定。上ノ国観音堂に安置されている。(像高23.5cm)
8	有形文化財	絵画(裏書輪	H1. 2. 23	安政2(1855)年に松前藩領の一部が幕府直轄地となった際、城下の名主等が復領運動に奔走し、安政4(1857)年の復領につながったため、藩主崇広が松前の商人である輪嶋屋太左衛門名の裏書をもって復領に尽力した有力者等々に下賜したもの。
9	有形文化財	嶋屋太左衛門)	H1. 2. 23	
10	有形文化財		H1. 2. 23	
11	有形文化財	書(裏書輪嶋	H1. 2. 23	
12	有形文化財	屋太左衛門)	H1. 2. 23	
13	有形文化財		H1. 2. 23	
14	有形文化財	書(松前氏13代道広筆)	H5. 8. 10	道広が祖廟詣での際に八幡宮に奉納したもの。東籬園と書かれている。
15	有形文化財	書(松前氏14代章広筆)	H5. 8. 10	松前藩領上知を解かれ梁川より帰国した章広が、復領祈願として八幡宮に奉納したもの。
16	有形文化財	書(松前氏14代章広筆)	H5. 8. 10	天保3(1832)年、石崎にあった牧場を章広が巡視した際に読んだ俳句3句。
17	有形文化財	チカルカルペ	H5. 8. 10	生地は厚手の紺木綿で、衿と袖口の文様は樺太のアイヌ文様に似ている。裏に「西川賢作」と記載。
18	有形文化財	マエタレ	H5. 8. 10	生地はオヒョウで切り伏部分は紺木綿。裏に「上ノ国六年笹浪キサ(笹浪家11代当主久英氏の母)」と記載。
19	有形文化財	テタラペ	H5. 8. 10	生地はイラクサまたは麻で、切り伏部分は紺木綿。刺繍糸は白と紺の木綿で、縫い糸はイラクサ。裏に「上ノ国六年笹浪キサ(笹浪家11代当主久英氏の母)」と記載。
20	有形文化財	マエタレ	H5. 8. 10	生地はオヒョウ。切り伏部分は紺木綿。裏に「西川賢作」と記載。
21	有形文化財	チカルカルペ	H5. 8. 10	生地は茶格子木綿で衿は紺木綿。切り伏部分は古い紺木綿で、刺繍糸と縫い糸は紺木綿。
22	有形文化財	アッシ	H5. 8. 10	生地はオヒョウ。刺繍糸は紺木綿。
23	有形文化財	マエタレ	H5. 8. 10	生地はオヒョウ。刺繍と切り伏部分は紺木綿。
24	有形文化財	チカルカルペ	H5. 8. 10	生地は茶格子木綿で、切り伏部分は古い紺木綿。
25	有形文化財	蝦夷錦(袱紗)	H28. 3. 10	江戸時代に山丹交易でもたらされたと思われる旧笹浪家所蔵品の絹製袱紗(縦63.0cm, 横65.6cm)。
26	有形文化財	アイヌ絵巻	H9. 2. 24	旧笹浪家所蔵品で、筆者や製作年代は不明であるがアイヌの生活や風俗が描かれている。

27	有形文化財	短刀及び拵一式	H9. 2. 24	旧笹浪家所蔵品で、元享年間（1321～1323）に備前住左近将監助光の作と言われる。
28	有形文化財	松前平角（ばっかく）の墓	H13. 6. 5	寛政元（1789）年、クナシリ・メナシの戦いに出陣した松前平角源則忠の墓。寛政3（1791）年には高橋壮四郎らとともに樺太を調査し、樺太見聞書を著している。
29	有形文化財	赤門の墓	H13. 6. 5	蠣崎波響の養祖父、蠣崎将監廣当の墓とされる。
30	有形文化財	南條の墓	H13. 6. 5	享保18（1733）年から寛保2（1742）年まで寺社奉行を勤めた南條安右衛門の墓とされる。
31	無形民俗文化財	大留鹿子舞	S50. 12. 13	大留地区を開拓した人々が、大千軒岳に住む鹿を形どり、集落の平和や五穀豊穡を祈願して大留山神社に奉納したのが創始と伝えられる。
32	無形民俗文化財	石崎奴	S57. 9. 10	江戸時代から伝えられ、石崎八幡神社の祭典に毎年奉納されている。



石崎奴



大留鹿子舞



テトラペ



松前平角の墓



アイヌ絵巻



No.9 絵画「東鳳鳴『唐人筆花鳥之図』」(左)



No.13 書「伊藤東涯書『喫茶去』」(右)

国登録文化財

NO.	種 別	名 称	指定年月日	概 要
1	有形文化財	石崎漁港トンネル	H15. 1. 31	外海の影響を受けない漁港を確保するため、堤防によって外海・川と隔て通航を確保、岩山を掘って作られたトンネルである。道庁港湾課長中村廉次の計画とされ、昭和9年完成。長さ45m、幅員9mの半円断面コンクリートブロック造で坑門等には石材を用いている。



完成当時の漁港トンネルと周辺の様子



現在の漁港トンネルの様子（外海から）

3. 6 類型の文化財

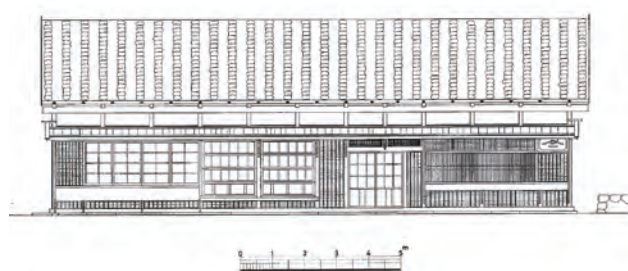
(1) 有形文化財

① 建造物

勝山館跡直下は、北海道で最古の民家及び社寺建築といった来歴を持つ旧笹浪家住宅（重文）、上國寺本堂（重文）、上ノ國八幡宮本殿（道有形）が連立し、北海道内でも数少ない中近世の文化財が集中する場所となっている。

旧笹浪家住宅（重要文化財）

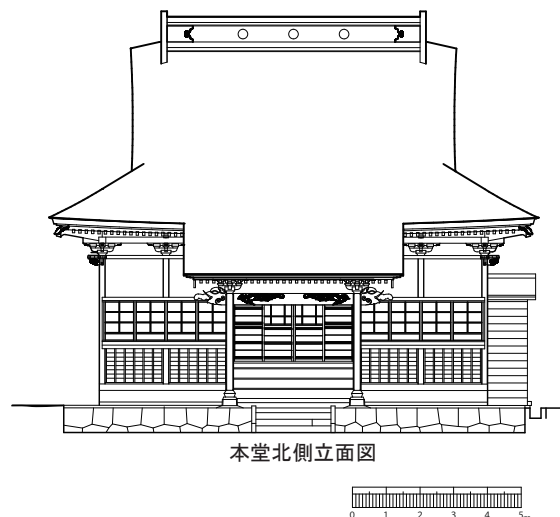
旧笹浪家住宅（主屋）は、代々漁業を営み、ニシン漁で栄えた能登屋笹浪家の住居と仕事場として使われた建物である。主屋は、五代目の



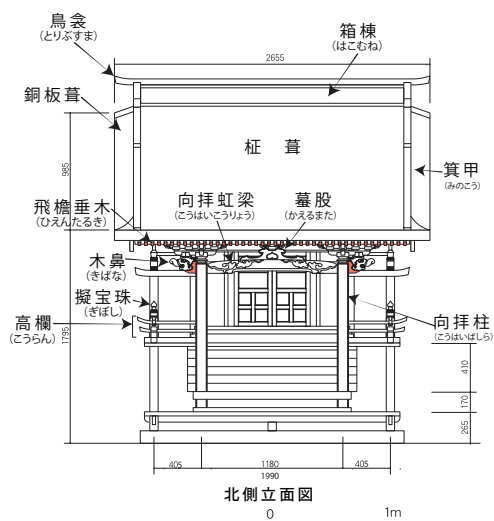
久右衛門が建てたと伝えられ、江戸時代末期の200年近く前の建築とされる。北海道に現存する民家建築としては最も古く、当時のニシン漁の繁栄を今に伝える大変貴重な建物とされている。平成2年に主屋、平成3年に土蔵の敷地を町が購入し、建物は寄贈を受けている。

上國寺本堂（重要文化財）

上國寺の創立は、菅江真澄の記録によると永禄年間（1558～1570）の建立とされる。当初は、真言宗に属していたが、江戸時代中期に浄土宗に改修し、現在に至っている。内陣の支輪に書かれた墨書から宝暦8（1758）年の建立とされ、道内に現存する本堂としては北海道で最も古いことから平成5年に重要文化財に指定されている。平成20～23年には「平成の大修理」として半解体修理が行われ、復元年代を現在の本堂が建立された11年後の最も本堂が整備された明和6（1769）年としている。



上ノ國八幡宮本殿（道有形）



上ノ國八幡宮本殿は、文明5（1473）年に松前氏の祖である武田信廣が勝山館に館神として創立したと伝えられる。同本殿は、上ノ国三社の一つとされ、松前藩との深い繋がりによって崇敬されてきた歴史をもつ。本殿の地垂木先端に反り増しが付くことも注意されるなど、様式上は元禄12（1699）年造替（『福山秘府』所収）とするのが妥当とされている。上ノ國八幡宮本殿は、勝山館に創建以来の由緒来歴が明らかであり、江戸前期の形態をよく留めていることから、北海道における神社本殿として高い歴史的価値が認められている。

② 美術工芸品

考古資料（写真1）

遺跡の発掘調査が多く実施されている上ノ国町では、重要文化財「北海道上之國勝山館出土品」の他に土器を始めとする考古資料が多く所蔵されている。上ノ国では、最終氷期が終わり、津軽海峡が形成される縄文時代になると、前期～中期にかけて東北地方北部の影響を強く受けた円筒土器文化圏に属し、後期から晩期にかけては道央・道南と積極的な交流を図りながら、「上ノ国式土器」のように特徴的なデザインの土器が作られている。町内の縄文時代の遺跡では、大澗遺跡（早期）、十兵衛沢遺跡・勝山館遺跡（前期）、大安在B遺跡（中期末）、上ノ国遺跡（晩期）などがよく知られている。

その後の上ノ国では、続縄文時代、擦文時代においても連綿とした人々の営みの痕跡がみられ、和人が本格的に北海道に進出する以前、既に多くの人々が居住していたことがわかる。

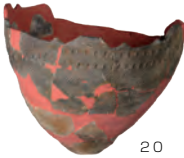
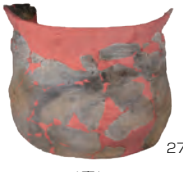
縄文時代	早期 (約10,000年前～6,000年前)	 1 (深鉢)	 2  3 (深鉢)  4
	前期 (約6,000年前～5,000年前)		 9  11
	中期 (約5,000年前～4,000年前)	 5  6  7  8 (前半)	 10 (深鉢)  12 (後半)
	後期 (約4,000年前～3,000年前)	 13 (深鉢)  14 (壺) (前半)	 15 (深鉢)  16 (深鉢)  17 (注口土器)  18 (注口土器) (後半)
	晩期 (約3,000年前～2,300年前)	 19 (深鉢)  20 (深鉢)  21 (壺)  22 (浅鉢)  23 (浅鉢)  24  25  26 (浅鉢)	
続縄文時代	(約2,300年前～1,300年前)	 27 (壺) (前半)	 28  29 (壺)  30 (後半)
擦文時代	(約1,300年前～700年前)	 31 (壺)  32  33 (内耳鍋)  34 (環)  35 (把手付土器)	
1. 大潤遺跡 2、3、5、6、8. 勝山館遺跡 4. 桂岡遺跡 7. 十兵衛沢遺跡 9～11. 大岱沢A遺跡 12. 大安在B遺跡 13. 境川遺跡 14～16、18. 新村4遺跡 17. 四十九里沢A遺跡 19～26. 上ノ国遺跡 27. 洲崎館跡 28. 上ノ国市街地遺跡 29・30. 相泊遺跡 31～35. ワシリ遺跡			

写真1 上ノ国町出土土器一覧

（２）無形文化財

上ノ國八幡宮祭の切り声

切り声とは、ニシン漁の『網起こし』の時に、船頭の「ドットゴセー（一気に網を起こせ）」の掛け声と船員のヤン衆達が「エーンヤーサー」と力を合わせて網を引くときの掛け声である。この切り声は、江戸時代後期の頃より日本海沿岸で使われていた漁師の掛け声の掛け合いと言われている。

大正の頃に上ノ国でニシンが取れなくなると、余市や小樽に人々が移り、この「切り声」も一緒に伝えられた。

上ノ國八幡宮祭では、神社の行列に同行する山車二台「信廣山」と「蛭子山」の采配（さいはい）と言われる役の人達が、先導してこの切り声を歌ってから家に招いてもらう。

＝上ノ国大漁祝唄＝（ドットゴセー）～切り声
と下声～

<現代>

ドットゴー ドートゴーセーノコリャ
エー

ハー ヨイヤーサー

エーエーエ ヨーオイヤーサァ

ヨーイトオナー（ホラ）

ホーラーエンヤッ アリャアリャドッコイ ヨー

オイトゴ ヨーオイトゴオナー

ホーラーエー このヤー座敷ワー

めでたい座敷ヤー エー

ヤトゴセー ヨーイヤー

ホーラーエー 鶴と亀とーがー 舞い遊ぶー ヨーオイトオーナー

ホーラーエンヤッ アリャアリャドッコイ ヨーオイトゴ ヨーオイトゴオナー

エーーンヤーサー

エーンヤーサー ※くりかえし

ヤーーンサノホラ

ドーッコイ



信広山の切り声

(3) 民俗文化財

① 有形民俗文化財

円空作仏像観音坐像（町指定文化財）



円空は、寛永9（1632）年に現在の岐阜県で生まれ、その後東北地方を訪れて寛文6（1666）年の35歳の時、北海道に渡り、仏像を残したとされる。

上ノ国観音堂に安置される円空仏は全身が摩耗して、さらに頭部が全く原形をとどめていない。円空仏を管理する地元の観音講の人たちは、この円空仏について病気やけがの治療を願い、患部と同じ部分を削り煎じて飲んだり、子どもたちが縄をかけて遊んだという。観音講の活動は、毎週土曜日の午前中に行われ、地域の人たちの信仰の対象として親しまれている。

ニシン漁具（アバ）



中須田地区の京谷家に伝わるニシン漁で使用した刺し網とアバ（浮き）である。

中須田地区は、やや内陸に位置して農業が盛んな地域である。

所有者の京谷氏は、「昔、ニシンが大漁に獲れると舟で天の川を下って、日本海で漁を行っていた」と話していました。

アバには、ニシンの鱗が付着し、「鯨

大漁」や天保～大正の年号の墨書がありました。これらは、かつてのニシン漁の繁栄を今に伝える貴重な資料とされている。

② 無形民俗文化財

石崎奴（町指定文化財）



石崎奴の行列は、松前藩主が参勤交代で江戸に登城する時の道中奴である。その当時、石崎の領主であった斉藤流松前家の松前平角が文化10（1813）年に石崎八幡神社が新しく造営されるのを機に松前藩17代藩主章広より松前藩の祭典で使用していた長柄、弓、鉄砲、木綿紋付等を譲り受け、村の若者に教えたことが始まりと言われている。

(4) 記念物（史跡・名勝・天然記念物）

① 史跡

史跡上之国館跡

史跡上之国館跡は、天ノ川河口に所在する花沢館・洲崎館・勝山館の15世紀中頃の室町時代に築城された3つの館跡である。花沢館館主の蠣崎季繁に仕えていた武田信広は、アイヌのコシヤマイン父子を七重浜（函館市～北斗市）で討ち取り、一連の争いを収束させ、天の川北岸に洲崎館を築いて蠣崎季繁の娘婿として蠣崎家を継いでいる。

信広は、若狭武田氏の出身で関東足利、下北田名部を経由し、同蠣崎を知行して、享徳3（1454）年に上ノ国に渡海したとされる人物である。

上ノ国での地位を固めた信広は、1470年頃に旧字名で「無碇」の名を残す大澗に流入する宮ノ沢と寺ノ沢に挟まれた八幡野丘陵北東斜面に、堅固な防御施設を有する勝山館を築城している。

これらのうち、洲崎館跡と勝山館跡では、和人とアイヌの出土品が確認され、中世における和人とアイヌの歴史を解明する上で欠かせない史跡となっている。



花沢館跡



洲崎館跡



勝山館跡



アイヌ墓と和人墓

昇平丸座礁地点

明治3（1870）年、上ノ国町木ノ子沖で座礁した昇平丸は、嘉永6（1853）年5月に薩摩藩が他藩に先駆けて建造した洋式軍艦である。

その昇平丸に関しては、平成4年に上ノ国町内有志で結成された浪漫倶楽部上ノ国が、昇平丸の遭難に関わる資料調査、沈没箇所の明確化、伝承事実の解明など目的として講演会や模型の製作などを行い、昇平丸の周知活動を実施している。

昇平丸は、幕府献上後に海軍の練習船として使用され、安政2（1855）年に勝海舟を乗せ、品川を出発して48日間を経過して長崎へ到着している。

明治元（1868）年咸臨丸とともに幕府から明治政府へ引き継がれ、翌年には咸臨丸と共に、明治政府から北海道開拓史に移管される。

昇平丸の最後の出航は、品川から函館並びに銭函を目指す最中、上ノ国町の猫の沢沖で座礁し、沈没している。この際に、乗組員 19 名中 5 名が亡くなっている。



昇平丸供養塔

上ノ国漁港遺跡

上ノ国漁港遺跡は、上ノ国町を東西に貫流して日本海に注ぐ天の川河口の西へ約 700 m の大潤湾に位置する。

発掘調査は、函館土木現業所が漁港施設用地を造成するに際し、上ノ国町教育委員会が昭和 58 年 10 月、昭和 60 年 7～8 月に実施している。上ノ国漁港遺跡は、本格的な海底発掘調査として昭和 49 年に実施された北海道檜山郡江差町沖の「開陽丸」の調査、昭和 58 年 7 月に実施された長崎県松浦市鷹島南岸の「床浪遺跡」の調査に続き 3 例目とされる。

調査箇所の海底面は、水深約 1.5～7 m と比較的浅く、エアリフトを用いて遺物を吸引して行っている。

出土遺物の大半は、陸上より廃棄されたと考えられる陶磁器が大半を占め、その中でも有田焼を中心とした肥前産の一群が多い。また、陶磁器の時期別の点数は、Ⅰ期（1580～1600 年）33 点、Ⅱ期（1600～1690 年）111 点、Ⅲ期（1690～1780 年）443 点、Ⅳ期（1780～1860 年）279 点、Ⅴ期（1868～1945 年）318 点、18c～幕末 4 点、18c 以降 186 点、時期不明 92 点の 16 世紀末～近代の陶磁器が 1,466 点確認されている。



海底の様子



調査風景

② 名勝

名勝では、海岸段丘から見る海方面の景色や山方面の紅葉、山岳部からの眺望がある。特に、道の駅もんじゅ周辺では、夕日や奇岩の文殊岩・窓岩などが人気のスポットとなっている。

七ツ岳

七ツ岳は、標高 957m の山でその周辺部にブナを主とする天然林が広がっている。七ツ岳の山名

は、知内町側から見た時、この地域に突き出たようにそびえ立つ七ツ岳、親岳、牛岳、燈明岳、馬岳など七座があり、その中でひととき高く円錐状に起立して見え、盟主に相応しい山容であることから「七ツ岳」と呼ばれている。

七ツ岳山頂からは、天候が良ければ大千軒岳、横津岳等のほか、函館、下北半島や津軽半島の山々を一望することができる。

また、風景林内には「七ツ岳大沼」等があり、四季折々の景観にすぐれ、紅葉の秋のほか、自然探勝、登山等、春から夏にかけて多くの人々に利用されている。



七ツ岳の紅葉（手前が大沼）

③ 天然記念物

天然記念物では、ブナ林や湯ノ岱の温泉、近年生息数が減少しているニホンザリガニ、地元でゴジラエビと呼ばれるエビなどが知られている。

また、天の川河口は、冬季間にオジロワシ、オオモズ、カンムリカイツブリなどが飛来し、バードウォッチングを楽しむことができる場所でもある。

ニホンザリガニ

ニホンザリガニは、山地の周縁部で、冷たい湧水がわずかに流れる溝や沢に生息している。普段は泥の中や石や倒木の下に隠れており、主に広葉樹の落ち葉（半腐食）を食べている。

かつては、上ノ国町でも人家の近くで生息していたが、現在では人里離れた丘陵地などで確認することができる。

ニホンザリガニの体色は、暗褐色でアメリカザリガニより小さく、はさみの丸みが強い。



イタヤカエデの葉に身を
寄せるニホンザリガニ

湯ノ岱温泉

上ノ国中心街から木古内方向へ約 16km、山間の盆地に軒を連ねる湯ノ岱地区の一角に所在し、泉質が炭酸泉の温泉である。弘化3（1846）年に湯ノ岱を訪れた松浦武四郎は、「甚の熱湯也。側に人家壱軒。此処に行暮候ものは止宿するによろし。温泉壺一ヶ所。夏分は江差より湯治人来る也」、また機能について「疥癬・切疵・疝気・痔瘻・瘡等也」と記録する（秋葉 1999）。

現在、清流天の川のほとりに存在する上ノ国町国民温泉保養センターの浴場には、3種類の温度



湯ノ岱温泉浴場

(35℃、38℃、42℃) の浴槽とうたせ湯があり、週末には遠方から訪れる人々で賑わいを魅せている。

(5) 文化的景観

夷王山の文化的景観

夷王山は、勝山館跡の後方にそびえる標高 159 m の円錐状の山である。山の中腹には、勝山館の人々の墳墓である夷王山墳墓群が分布している。昭和 62 年には勝山館跡の一部として史跡に追加指定されている。寛政元（1789）年に菅江真澄が訪れた際は、「医王山頭陀寺、永禄七（1564）年三月」と記され、寺が所在していたことが記録され、中世以来信仰の対象となっている場所でもある。

山頂に登ると勝山館跡はもちろんのこと、洲崎館跡、天の川を一望でき、中世の日本海交易の歴史遺産を体感できる場所である。



夷王山遠景



夷王山山頂からの景色

(6) 伝統的建造物群

上ノ国地区伝統建造物群



上ノ国地区の史跡勝山館跡直下は、北海道で現存する寺院・民家・神社建築で最も古いとされる重要文化財上ノ国寺本堂、重要文化財旧笹浪家住宅、道指定文化財上ノ国八幡宮本殿が100 mの間に隣接して所在する地域である。特に、上ノ国寺や上ノ国八幡宮の創建は中世まで遡る歴史を有し、北海道内では稀な景観を呈している。

しかしながら、周辺環境を含めた整備が進んでいないため、その魅力を十分にアピールするまでには至っていない。

6. 文化財保護の課題

上ノ国町における文化財の保護は、これまで行政主導で取り進められ、未指定文化財や時代が古い物件を中心に取り進められることが多かった。そのため、対象とする文化財に偏りがみられ、その手法については課題が残る現状にある。

また、個人が所有する未指定文化財の本質的な価値を見出していないために、積極的な保存活用につながらないケースも近年増している。地域に所在する文化財が、その地域の中で住民とどのような関わり合いをもっているのか、今一度精査する必要がある。

地域でその価値が認められている文化財にもかかわらず、近年の急激な都市部への人口流出・過疎化・少子高齢化による人材の不足によって、郷土の歴史文化が消滅の危機に直面しているものもある。

また、近年は北海道にも台風が頻繁に上陸し、大規模地震の危険性も指摘されるなど、従来想定されなかった事態も発生している。そのため、あらゆるケースを想定し、所有者及び行政のみならず、文化財が所在する地域住民も含めた防災対策などの取り組みも必要となっている。

今後は、多くの人々が参画し、社会状況の変容に伴い保存活用の危機に瀕した文化財について、地域の文化や経済の振興の核として未来へ継承する方策を模索し、文化財がまちづくりの一翼を担い、これからの時代を切り拓く手段にふさわしいものになることが重要である。

そして、それを実践するためには、行政や有識者及び研究機関が、地域住民と同じ目線で文化財を活用したまちづくりに取り組み、意見交換を進めるなどきめ細かい対応を積み重ね、協働体制を図っていくことが大切である。

実践にあたっては、文化財の調査や保存活用事業の企画・立案及び運営を担う組織を創設し、円滑に歴史文化の保存活用を推進できる体制を整えることが不可欠である。

今回の事業では、文化財の把握が十分ではない地区もみられるため、地域住民や団体が中心となって、行政、有識者、その他様々な機関や部署との連携し、今後も継続的に文化財を調査していく必要がある。構想策定後は、高齢化や担い手不足が原因で活動が困難になっている団体間の横の連携を深めて、相互に助け合う取り組みが生まれることも期待される。

また、集められたマイ文化財は、今後刊行が予定されている『上ノ国町史』や町のホームページに掲載し、町民自らが調査した自分たちの歴史文化を知り、それを次世代に継承していくサイクルの構築を作り上げていく必要がある。